

滑稽俳句はピン芸人(二)

伊藤浩睦

うかりうかりとひととせ過ぎし
時遅し大器晩成時間切れ

山の向うに潜みし春に
幸の落ちこぼれでも拾ひたし

次第に尖る掛乞の声
傾向と対策又もしくじりて

雨戸を躁れば今朝の初雪
小便も我慢の限界外廁

四句を例として挙げましたが、前句の七七があれば、そこにある緊張を緩和すれば笑いが成立しますから、十七文字で緊張の緩和を行なわなければならない滑稽俳句とは異なり、作り易いのです。

急な雨傘さしかけてくれた人
謎めく笑みを交すささやき
ときめけば神の話を聞かされて

こちらは連句の恋の句の部分で、恋の呼び出しの句、恋の句、恋のオチの句で物語が構成されていますから、謎めいた笑みでささやいてきた異性は、宗教の勧誘だったというオチで笑いが取れます。

日ごろは意識して滑稽俳句を作る人たちではないのですが、前句に付けたり、連句で付けたりすれば、笑いが取れる句になるのです。

笑いを取る方法として、なにかと結びつけるという手法があります。

春風や替えたばかりの屋根が飛ぶ

定例句会に出した自作の句ですが、この日の句会では、屋根替と春風が兼題として出されていました。その兼題を一句に押し込んでしまったので、句会に出ている人たちは笑えます。しかしその日の兼題を知らない人にはなんのことか分かりません。

吟行に行くと、土地の名や見ているものと結びつけて滑稽句は割りと簡単に作れます。

退屈の日間賀と問はれ春渡船

これも自作ですが、日間賀島は愛知県にある島の名で、吟行地からそこへ行く船が出ていました。日間賀（ひまか）は、暇か、に掛けています。

なにかと結びつけると、なにかが緊張感を作ってくれるのでその緩和が容易なのですが、その場にいる人でないと理解することができず、他へ持って行くことはできません。

独立した十七文字だけで笑いを取ろうとした場合には、結びつけるなにかを、読んでくれる人が知っているものにするという方法があります。河童忌という兼題が出た時に、

蜘蛛の糸ペンキ塗り立て羅生門

あえて兼題の河童忌を用いず、季語は蜘蛛にしたのですが、芥川龍之介に縁のあるものを並べたので、読んでくれる人がみんな知っているという条件に当て嵌まると思ったのですが、これが意外なほどにウケないのです。参加者の多くが、青蛙おのれもペンキぬりたてか、という句を知らなかったのです。かどに十七文字での笑いは難しいのです。

(続く)